現代コミュニケーションの光と影 ── 哲学思想の観点から

尾関　周二

ただ今ご紹介にあずかりました東京農工大学の尾関と申します．

午前中の橋元先生が研究の履歴のようなことをおっしゃいましたので，私も最初に少しそのへんを述べさせていただきます．私は，京都大学の哲学科を出まして，その後は東京農工大にまいりました．大学在学中は，もっぱら哲学，特にドイツのヘーゲルとかカント，マルクスなどドイツ古典哲学を主に勉強していました．私自身の年齢からしても，いわゆる60年代後半の大学紛争で，在学中はなかなか授業も満足に聞けないようなときも多々ありました．今思い出してみると，いろいろな意味で良い経験になったわけです．私は結構学生運動とか，大学院生になっても，院生協議会の事務局長とかもやりまして，そういう点でも経験があります．一つの私自身の気持ちとしては，いまだにその当時と変わらずに，時代を批判するというか，社会批判というポジションを学生の頃に自分なりにとったのです．今までその方向でずっときているというところがあります．そういう中で，哲学それ自身は古典哲学の勉強から始まったわけで，マルクスの考え方とか社会哲学的というか，社会理論的なものに非常に関心を持って勉強してきたという面もあります．

私が学生の頃に，みなさんご存知かもしれませんが芝田進午さんという人が，『人間性と人格の理論』という本を出されまして，それが当時の学生にとっていろいろ勉強する一つの前提になりました．それがヘーゲルとかカントとかの勉強とも重なり合うことがあって，労働という視点を軸にして社会を考えたいということで，大学のときにはそういう方向で勉強やっていました．

尾関　周二　氏

しかし，その芝田さんの労働の視点から社会，あるいは現代の問題を考えていくという視点だけでは，やはり不十分なところがあるのではないかということで，当時，言語とかコミュニケーションということが，主にアカデミックな言語哲学という方面で議論されてきたということもあって，私自身は，労働の哲学的な考察ということを踏まえたかたちで言語やコミュニケーションということに関心を持って勉強してきました．

最初にカッシーラーとウィトゲンシュタインの言語哲学を勉強しました．幸いなことに，戸坂潤賞というのが当時あり，それにたまたま投稿しましたら賞をもらえるというような

Ozeki Shuji　東京農工大学大学院共生科学技術研究部

ことがあって，それも励みになってかなりの時期，言語哲学というか，それと関わったコミュニケーション論というものを勉強してきました．

そういう過程のなかで，今日のテーマになっているような情報化の関係，コミュニケーションの一つのあり方としてコンピュータに媒介された情報のコミュニケーションということにかなり早い段階で関心をもち，また90年代の半ば頃にはインターネットが始まって，その当初から関心を持ってインターネットやそれにまつわるような論文も書いてきました．

ただ，この数年来はどちらかというと，私自身が農学部にいるというようなこともあって，エコロジーの問題，学生も結構そういう環境,エコロジーに関心があるということで,環境の問題に関心を移してきました．この数年来は，主に環境哲学とか，環境思想ということで，コミュニケーションに関しても「自然とのコミュニケーション」というような言い方もして，少しエコロジーにもシフトしているところです．

最近は，どちらかといえば，今いったような環境哲学・環境思想ということを中心に仕事をしています．

環境の問題というと，どうしても「共生」ということとの関わりがありますから，共生概念を巡ってコミュニケーションなり記号論というものに関心をもち続けていましたが，インターネットやメールの活用ということで，非常に急激に情報化が進んでいるということもあって，環境と情報という二本立てで現在やっているのです．

２年ぐらい前には，環境と情報両方の問題を考えていくことが重要ではないかというようなことを思い，『環境と情報の人間学』という本を青木書店から出しました．やはり周りを見回してみますと，環境のほうに関心を持っている方は情報の問題については，あまり関心がない．勿論いろいろインターネットなどの活用はしているのだけれども，情報理論が，あるいは情報化社会というものがもつ問題については関心がない．逆に，情報のほうに関心のある方は，環境，エコロジーについてはあまり関心がない．哲学も，私の近くというか知り合いの方を見ても，その両方に目配りをしようという方はあまりないのではないか．そんなようなこともあって，少し環境と情報の両方を絡み合わせるかたちで問題を考えていく必要があるのではないか，と思い始めています．

しかし，全体としては環境のほうにウエイトをおいた進行をしていったのですが,今回,こういうかたちで機会を与えられまして，短期間ですけれども，改めて今までの仕事などを振り返ってみまして，やはり両方のかかわり合いを考えていくということが重要ではないかと改めて思っているところです．

今日の私の報告の一つの基調というかバックボーンの点をそういうところに置きながら，話をさせていただこうかと思っている次第です．

講演レジュメということで，１枚の紙に全体の見出し的なものを書かせていただきました．また参考資料ということで用意しましたものは，かなり詳しく，余計なことも入っているかもしれませんが,時間の進み具合とか,みなさんの関心の持ち具合を自分なりに考えながら話を進めていきたいと思います．両方を照らし合わせながらお話を聞いていただけるとありがたいと思います．

それで,「はじめに」というところで「インフォメーションとエコロジー」ということが書いてあります．これは，先程から述べている，私の意図を示すものなのです．やはり，情報の問題と環境の問題というのは，ある意味では現代の二大トピックスであり，私の場合は，哲学思想的な方面から取り上げる必要があると思っています．

ある面で非常に似ている面があるのです．類似している面は，いずれも非常にグローバルな性格をもった問題であるということです．情報化というのは，まさにグローバル化の一つの大きな手段であります．また環境問題に関しても，公害から始まって今や地球の存亡という言い方で言われるようなグローバルな性格を持っているものなのです．しかも両方ともが科学技術と深くかかわった性格を持っている，という点が言えるのではないでしょうか．従って，グローバルで，且つ科学技術というものが我々の生活と深くかかわっているということで，人間存在，哲学者が非常に好む仕方で言えば，人間存在のあり方が問われる時代になったと思います．５年ぐらい前に日本哲学会で,「情報化における人間存在」ということで，ちょっとしたミニシンポみたいなものがあり私も報告しました．やはりエコロジーと並んで,情報化という問題が,人間存在のあり方というものを問うという，そういうことが多くの哲学者の関心の一つの重要な焦点になったこともあって，そういうシンポジウムが開かれたのだろうと思います．そういう点で，この２つの問題が，大きな類似性を持っていると思うのです.しかし，この２つの問題には，ある意味で非常に対照的な社会的性格があるのではないかと思います．端的にいえば，資本主義的な成長主義というものに対して，エコロジーというか，環境の立場というのは,皆さんご存知のように,成長主義に対して基本的には反対という立場です．多かれ少なかれ，そういうスタンスがエコロジー，環境という思想の立場です．

それに対して，情報化というのは成長主義というか，成長主義に非常に深くかかわる資本主義的なシステム，そういうものに対してある種の親和性を持つという点がある．しかし，これは勿論，今は非常に極端な対照的な言い方をしたわけで，情報化という問題も知的所有権の問題とか，例えば経済価値，市場的な経済価値の古典的なイメージ，そういうものに対して非常に大きな動揺を与えている．そういう意味では，必ずしも資本主義的,成長主義的なものと親和的であるとはいえませんし,逆にエコロジーの立場というものも,例えばハイブリッドカーなど，市場的価値を増すために環境に優しいというキャッチフレーズが至る所に見られるようなこともあります．相対的なところもありますけれども，しかしどちらかといえば，エコロジーとインフォメーションというのは対照性みたいなものがあるのではないかと思います．というような点を考えると，いろいろな意味でインフォメーションやエコロジーというものは非常におもしろい現代の２つのトピックスとして考えておく必要があるのではないかと思います．

結論から言えば,エコロジー的な考え方は,情報化なり情報という視点を展開していくために非常に重要ではないか，と私は思っています．情報理論なり，情報科学というものがエコロジーと不可分なかたちで，深く結びついて発展していくということが非常に重要ではないかというのが，私の結論です．

前置きめいたことが非常に長くなりましたけれども，この後レジュメに沿って少しお話ししていきたいと思います．

専門家のみなさんを前にして，非常に分かり切ったことを述べているということもあるかもしれませんけれども，話の流れとして一応聞いていただいて，ご批判なりをいただければと思います．

まず最初に,「メディアと人間」ということでお話ししていきます．先程の話やご質問にもありましたけれど，コミュニケーションとは何かというようなことがあります．この講演の一つの趣旨に触れてくる大きな問題だと思います．私なりの考え方を述べますと，よくいわれますように，コミュニケーションのもともとの語源はラテン語の〝communicar-

e″にあると言われています．類縁語としては，そこに書いてあるように〝commune″とか〝common″，〝community″です．そういう共同体なり共同性，そういうものと類縁的な言葉にあるということです．もともと〝communicare″というのは，共通のものを作り出すとか，共有するとか，共同化というような，そういう意味合いを含んでいるということです．むしろ伝達というよりも，共通のものを作り出すというほうが，語源的にはウエイトがある．この点を一つ強調しておいてもいいでしょう．

従って，ヤスパースという哲学者，コミュニケーションを非常に重視した哲学者で，皆さんご存知のように実存主義者です．ナチス反対の運動にもかかわった，非常に著名な哲学者なのですが，彼がコミュニケーションを重視して，神とのコミュニケーションということにも触れて，人間にとってコミュニケーションというものは非常に重要であるということをいろいろと語っております．非常におもしろいのは，コミュニケーションというのはドイツ人ですから「コミュニカツィォン」，そのコミュニカツィォンというのは，「伝達」と訳されるべきではない，あくまでもこれは「交わり」である，そういう言い方をしています．コミュニケーションという言葉について，交わりと理解すべきとし，伝達と対比させて使っているということがあります．その場合は，語源に近いような意味合いでコミュニケーションというものを使っているというふうに言えるのではないかと思います．そういうことを踏まえていえば，コミュニケーションというものは非常に単純に見えると同時に複雑な曖昧さを持っている．しかし，それを整理してみると，三つの側面から言えるのではないかということです．

今言いましたように，また勿論普通に言われるように，伝達，コミュニケーションには伝達性という面がある．それから，今〝communicare″という語源から言いましたように，交わり，人と人との交わり，母と子のコミュニケーションが欠けているから最近のいろいろな問題が起こるのだというふうにいわれる場合には，別にそこに伝達がないということではなくて，やはり交わりというか共感というか，そういうものが欠けているのではないかということです．そういう交わりという意味でのコミュニケーションということが第2番目です．

第3番目は，コミュニケーションというものはどうしても伝達という面がかなり強く意識されるわけですが，しかし，行為性，コミュニケーション行為というか，コミュニケーションそれ自身が社会的行為と考えられる場合もあります．これは，言語哲学者のオースチンが強調した有名な言葉，「話すことは為すことである」ということです．つまり，我々が何かを約束する，約束する際に言葉を発する，そのことが同時に，約束するということ，例えば，私が彼女に「あなたと結婚します」と言ったとします，「結婚します」ということが，これは単なる伝達ではなしに結婚の約束ということ，言うことがそれ自身，同時に約束するという行為をなしているわけです．だから，少なくとも「言っただけだよ」ということですまないのです．訴訟問題が起こったり，様々なトラブルが起こってくる．約束したではないかということで問いつめられるわけです．これはまさに行為である．しかも社会的規範を背景にした社会的行為である．裁判沙汰になる場合もあって，驚くような賠償金という話にもなりかねない．たった一言の言葉がそういうことにもなる．それはまさにコミュニケーションが行為的性格をもっていると言えるわけです．

今言ったような伝達，交わり，行為性ということは，哲学でよく言われる「人間の意思の三側面」ということで「知・情・意」と対応すると思います．そういう意味でコミュニ

ケーションということが，ある種の人間の全体性というあり方にかかわる，きわめて重要な活動であるということが言えると思います．

先程の私の履歴みたいな話で，労働概念だけでは，人間なり社会の問題は十分に考えられない，やはりコミュニケーションなり言語なりが，人間存在，あるいは社会のあり方を考える上で非常に重要ではないかと感じたことと非常に符合するわけです．そういう意味でコミュニケーションというものはあくまでも伝達，交わり，行為性という三つの視点から捉えていく必要がある．だから，その意味では伝達のみを強調するような，いわゆる伝達的コミュニケーション観というコミュニケーション観ですね．あるいは，交わりというものを，先程のヤスパースのような，伝達というものは否定されるべきで，交わりというものを専らコミュニケーションの本質として考えるべきだという，いわば交わり的コミュニケーション観ですね．あるいは先程言った行為性に特化するコミュニケーション観，これは今日の社会哲学の中では，オースチンとかハンナ・アレント，ハバーマスという著名な思想家の重要な視点としてコミュニケーション行為というものが考えられるわけです．いわば規範的なコミュニケーション，そういうどれか一つの側面を強調するだけでは不十分ではないか．やはり全面性ということで，しかも労働概念との関連において考えていく必要があるのではないかということです．そういう視点をもとに情報のコミュニケーション，メディア・コミュニケーションを，そこに位置付けて考えていく必要があるのではないか．それがコミュニケーションとは何かということで私なりに考えているポイントです．

それから，もう一つ，「人間とは何か」ということが重要な視点としてあると思います．これは当たり前かもしれませんけれども，改めて強調しておきたいのは，人間存在というものの三側面を見落とすことはできないと思います．これは古来，様々な哲学者が「人間とは何か」ということの定義的に述べてきたことと関わっています．これは皆さんご存知のとおりです．例えばアリストテレスでいえば「人間とは理性的な存在者である」とか「社会的な存在者」，あるいはアダム･スミスでいえば，「ホモ･エコノミクス」，「経済人」であるということですね．それからフランクリンなどの系譜をひいて「ホモ・ファーベル」とか．労働概念を一面的に強調したマルクス主義というのもホモ・ファーベルという面を強調したものであったかもしれません．そういうふうに様々にあるわけです．あるいはホイジンガーは「ホモ・ルーデンス」，「遊ぶ人」というような定義をしております．さらにいえば，「ホモ･デメンス」，「狂気の人間」というような言葉も少し前にはかなり流行りました．こういうように様々な人間の定義というものが，いわば哲学者の数だけあるわけです．しかし，そういうのをずっと通観してみて，人間存在の三側面ということで，まずは押さえるべき点があると思います．一つは，理性的存在，もっと正確にいえば知性的存在という意味でしょうか．理性というのは特殊な，限定したありようというものがありますから，知性的，あるいは意識的な存在という面．それから２番目として社会的存在という面です．これは先程から言っているように，アリストテレス以来の定義です．この社会的ということ自身にいろいろな意味合いがあって，いろいろな議論がまさにあって，社会的あるいは共同的な存在だということです．それから第３番目に，人間というものも生命体である，生物であるということです．これは当たり前の話ですけれども，しかし，エコロジー的な視点から見れば人間の自然的存在という点は，どちらかといえば哲学者が強調したい点で，現代の環境エコロジーの問題からすれ

ば，人間の自然的存在・生命的存在というものは非常に強調される一つのポイントになると思います．

いずれにしても，三側面というものが，今我々のテーマにしているメディアによるコミュニケーションを考える場合も，人間の三側面のあり方を念頭においてメディアをどう考えるかということが必要であると思います．どちらかといえば，人間の知性的存在・社会的存在という点は，現代においては，先程の言い方でいえば情報方面に関心が集中していく場合には，力点がそちらにいくことが多いのではないか．人間の自然的存在という面が，どちらかといえば強調点となる．逆に，場合によっては，バーチャルリアリティーによって自然の再現をするというような発想も出てくるわけです．しかし，三つの側面が調和していることが人間存在にとって非常に大きな意味を持っているという点は押さえなければいけないと思います．そういうことを踏まえて，コミュニケーションと人間というものについて一般的なことを述べました．

次に，それを踏まえて，ではメディアというものと人間の存在というものとがどうかかわっているかということです．非常におもしろいのは，私の学生の頃は，どちらかというと労働用具というか，道具と人間のあり方ということが非常に議論をされて，人間が人間になるにあたっての労働の役割という話と関連して，道具の発展ということが人類史を考えていく上で，非常に重要な視点でありました．その関連での技術論とか技術史という議論が多くなされてきました．私も関心を持って議論したことを記憶しております．そういう点では，メディアから，メディアの展開という点から，人類，あるいは人間存在の展開を見ていくということの関心が比較的最近大きくなっていったのではないかと思います．この後に出てきますけれども，マクルーハンというのが，そういう意味での大きな火付け役で，今日まで続いている関心の発火点になったと思います．

ただ，ここで非常に強調しておきたいのは中井正一です．彼は戦前に活躍した哲学者で，美学などにも関心を持った多彩な研究領域を持った方です．戦後は国会図書館の館長なども務め，実務的なことでも有能な方でした．この中井正一が，どちらかといえば労働の視点，道具の視点から考えることが支配的であった戦前に，メディアというものの発展と，文化，あるいは論理というものの展開を関連させて議論した非常にユニークな人物だというふうに思います．おそらく彼は，世界的にみても，最初にメディアと人類史の発展という問題を提起した人物ではないでしょうか．これは非常に強調して良いことではないかと，改めて私なりに述べさせていただきます．

彼は，「言われる論理」と古代文化というものを対応させています．それは弁証の論理ということで，これは対話と考えても良いと思います．この場合の弁証というのは，ディアレクティークということで考えてもいいでしょう．プラトンの対話篇などにも出てくる，そういうものに典型的なものです．話し合うという段階です．２番目に，「書き言葉」というものが支配的になって，それが中世文化ということで，瞑想の論理というものに対応されるものです．３番目には，「印刷される論理」ということで，近代です．グーテンベルクです．それは経験・行動・機能・生産の論理が対応するということで，この３段階を考えています．もとより，彼は印刷の論理を非常に重視しています．戦前すでにラジオや通信，今日の言葉で言うと電波・電子です，電波メディアが普及していっているわけですが，どちらかというと中井正一は印刷メディアを重視して，その延長・補完として当時の電波メディアを考えていくところがあったのです．

これに対して，現代が中井正一の考え方と大きく違ってきているところは，現代のメ

ディア論者フレッド・イングリスの考え方によく表れています．彼はそれほど著名ではないのですが，私が比較的共感を持って読むことができる人物です．その彼が言うのは，今日の段階として，電子メディアは一つの大きな段階である，つまり，中井正一の「印刷される論理」というのは，あくまでも書き言葉，筆記的文化の最終段階であって，それと区別される電子メディアというものが大きな段階だということです．この電子メディアの位置付けというのは，基本的にマクルーハン以降，オング，ボルター，ポスターなどの人たちと共通する，おそらくここにいらっしゃる皆様方もそういうふうに感じておられると思いますが，一つの大きな段階を画するというふうに捉えられるということです．つまり，インターネットに代表される電子メディアの登場以降では，印刷メディアというのは，ある種の過渡的な段階，つまり，近代の重要な始まりをなしているわけですけれども，それは書き言葉の延長で，文字の文化の頂点であり，同時に電子メディアの文化によって取って代わられる始まりである，という両義性があるわけです．大きくいえば，今日的には中井正一でなく，フレッド・イングリスが言ったような考え方に位置づけられると思います．インターネット以前に，マクルーハンとオングというのは，電子メディアの新たな段階の非常に大きな特徴を強調していたわけで，先駆的だったといえるわけです．

オングの考え方は，非常に興味深いです．J-W・オングはマクルーハンの弟子であるということですけれども，基本的には，その骨格においては電子メディアの段階のとらえ方にはかなり似たところがあると思います．オングの有名な著作としては，みなさんご存知の『声の文化と文字の文化』です．この両方の文化を対比させて考えていく．それが一つのポイントです．

声の文化というのは，最初の段階の文化です．２番目が文字の文化の段階，３番目は電子メディアの段階ということです．オングは最初の声の文化が再び回復される，声の文化の持つエネルギー，そういう積極面が，あるいは共同性というものが積極的に回復されるのが電子メディアの段階だ，という点を非常に強調しています．それに対して文字の文化，その頂点である印刷文化ですね．印刷文化というのは，我々個々人が内面化，内面性を深めていく一つの大きな人間性の形成の時期ではあるけれども，やはり人と人との結びつき，共同的な関係性みたいなものが希薄になっている．そういう点が文字の文化の特徴ということでオングは押さえているわけです．

そういう一つの人間のあり方，個と共同体の関係のあり方という点からメディアと人類史という捉え方があると思います．

次のボルターですけれども，『ライティング・スペース』という本が非常に有名です．その前に，『チューリング･マン』という本を出しております．ボルターという人は古典学者なのです．彼はもともとギリシア・ラテンの古典学者で，典型的な人文学者といってもいいと思います．人文学者というのは，ともすれば電子メディアには反発するというか，否定面をもっぱら強調するというポジションをとりがちですが，しかしボルターの興味深い点は，むしろ電子メディアの積極面，とりわけ〈ライティング・スペース〉という点に注目して，書き言葉以来のメディアの発展を見つつ，電子メディアによるライティング・スペースの特長を積極的に位置づけようという点にあります．先程言ったように，人間観に関しても，いろいろ議論はあるだろうけれども，現代の人間のあり方というのはチューリング・マシンというコンピューターを最初に作ったチューリングという人がいますけれども，その人が提起した考え方というものに則ったかたちでの人間観というものが，好むと好まざるかを問わず，今後支配的になって

いくのではないかということを言っているわけです．

「ライティング･スペース」の話を少ししますと，彼は書くということのメディア，それの発展ということに注目しようということです．例えば古代のメディアということでは，パピルス・ロールを第一段階と考える．２番目は中世の手書き，手で写すということ．３番目に近代の印刷というものがある．それから，現在の電子テキスト．彼によれば，それは第４の偉大なライティング・テクノロジーということです．その意味では，現代というのは印刷時代の最後を飾るときであって，新たな電子テキストということが我々の意識なり，人間のあり方というものを根底から規定するのだ，そういうふうに言っています．どちらかといえばボルターはそれを積極的な評価の方向で言っているわけです．しかし，他面で非常に興味深いのは，同時に人間がマシンと一体化しつつある．そういう視点からこんにちの電子テキスト，とりわけ，印刷本と違って様々にリンクが張ってあるハイパーテキストの，そのリンクを通じて種々の電子テキストが結びついているというところにも非常に注目するわけです．その意味では，彼が電子テキストのネットワーク，そういう意味ではライブラリーですが，それが世界的に一体化していくあり方を彼は強調して述べています．私たちが現在のパソコンでホームページなりいろいろな仕方で情報を得ることを考えると，早い段階でボルターの言ったことがほぼ実現して行っている方向にあると思います．

彼によれば，社会のあり方自身もネットワーク的なハイパーテキストに象徴されるような人間関係というものが作りだされていく，ある種のリベラリズムというのですか，その個人の自由というものが一層拡大しつつ，しかも諸個人がネットワーク的に結びついていく，そういう意味ではオプティミスティックなイメージを描いたといってもいいと思います．古典学者であるボルターのこういった考え方も，頭に置いておくことができるのではないかと思います．

それからマーク･ポスターという人物です．彼は『情報様式論』という本を書いています．これは現在でもしばしば言及される非常に興味深い本ですね．情報様式という彼の用語自身は，生産様式という言葉との対比から来ています．生産様式というのは，マルクス主義において歴史の発展ということで，奴隷制の生産様式，封建制の生産様式，近代の資本主義的な生産様式というように生産様式の発展ということが強調されたわけです．マーク・ポスターは，これに対して，生産よりもむしろ情報のあり方というものが人類の歴史を規定していく大きなものではないかということで，「情報様式」という言葉を作り出し強調したのです．しかもマーク・ポスターは当時のポスト構造主義の影響もかなり受けながら議論を展開するということもあって，メディアの発展と自己のあり方を関係づけるべきだと述べています．

そういう視点から彼の考え方を簡単に言いますと，先程の３段階，つまり口頭的な仕方でのコミュニケーション，それから印刷物に頂点がある書き言葉，それから電子メディアというところに対応させて述べているわけです．

マーク・ポスターの情報様式論ということで彼の言葉を引用してみます．

「最初の声の段階において，自己は，対面関係の全体性に埋めこまれることによって，発話地点として構成されている．二番目の印刷物の段階においては，自己は理性的／想像的自立性における中心化された行為者として構成されている．三番目の電子的段階において，自己は脱中心化され，散乱し，連続的な不確実性の中で多数化されている」

というように，自己のあり方自身が，電子メディア，とりわけインターネットが念頭にあると思いますが，より大きく変化している，そういう点に注意を喚起して，先程言ったように生産の様式に対して情報様式という，こういうタームで歴史の発展みたいなものを考えようという問題提起がなされています．これも非常に面白いです．

そういうことで，詳しくなりましたけれども，メディアというものから人類史の発展というのを見ていこうという議論が，コンピューターなりインターネットなり，そういうものが出てきて，電子メディアというものが，おそらく中井正一にとっては考えられなかったような，そういう独自のメディア・コミュニケーションの発展段階，そういう中でこれまで紹介したような，非常に様々なメディアを軸に人類史の発展というのも見ていこうという議論が出てきている．これまで紹介しただけでも，大きな共通性がありつつもかなり視点の違うところから多様な議論がなされてきていることが理解できると思います．

「コミュニケーションとは何か」，あるいは「人間とは何か」といった問題をメディアという視点から考えていくことの，ある種の重要性という点が，今言ったように，コンピュータ化なり情報化なり，とりわけインターネットというものが展開してきた中で，そういう問題性が非常に意識されてきたということを，一つ頭に置いておく必要があります．

それを踏まえて2番目に現代のメディア・コミュニケーションの特徴ということで話をしたいのですが，これは，私以上に専門に研究されている方がおられるので，どこまでお話をしていいのか迷うわけですけれども，私なりにポイントだけを少し述べさせていただきます．

私もインターネットの始まりの頃からいろいろ関心を持って，パソコン通信からインターネットなど，あの当時からパソコンを媒介にしたコミュニケーションを見てきましたが，やはりインターネットが急速に展開してくる中で，非常に大きな興奮を覚えた記憶があります．いろいろな意味での利便性といいますか，それまでのコミュニケーションには無い大きな特徴があると思います．双方向の不定の多数の間でそういうコミュニケーションが非常に容易にできる．ほとんどの大学や企業でもそうですが，このメールなどを使って会議の連絡なり会議の内容の報告などが非常に多くなされている．これは以前では考えられなかったような便利さ，利便性だと思います．そういうインターネットの利便性は，おそらく先程述べてきたマクルーハンとかオングとかが描いていたメディア・コミュニケーションとは，また違った段階に達しているのではないでしょうか．

従っておそらく，マクルーハンとかオングが知らなかったような問題，彼らが見なかったような問題がいろいろ出てきているという面があるのではないかと思います．

インターネットの特徴という点は，とにかく双方向でグローバルな仕方でコミュニケーションがとれるということです．今までに無かったような仕方で，様々な活動が可能になっている．今日，テロリズムがいろいろ問題にされていますが，ある意味では国際的なテロリズムも，まさにインターネットがあって初めて可能になったのだと思います．あるいは逆に，様々な国際的な運動，今，グローバルガバナンスという言葉が非常に語られているのですけれども，国際政治を動かして行く機関としてNGOなりNPOなりの組織が，国家という一国の政府と並んで非常に大きな影響力を持てるのも，インターネットのおかげでしょう．

私自身非常に大きな印象を受けたものとして，カナダで行われていた地雷についての国際会議があります．地雷の国際的な廃棄の条

約にカナダは積極的だったのですが，当時反対していたアメリカに遠慮する，他の国々もアメリカに遠慮してなかなかものが言えないという時に，NGOの団体が，各国のNGOを通じて各国の政府に働きかけた．そして最終的にはアメリカも同意せざるを得ないような，そういう方向で話がまとまったという経緯がありました．これなども，インターネットがあって初めて，そういうグローバルな政治的意思決定というか，そういう方向が出てきたのだと思います．そういう点では，インターネットに関していえば，利便性などで非常に大きな光の面があるわけです．しかし，であるが故に，逆にいえばそれの持つ影の面，さらにいえば，それが何らかの闇に繋がるような面に関しても我々は考える必要があるだろう，というのが一つの大きな問題点でしょう．私自身インターネットを使わずには何事もできないというような生活をしていますから，それなりに具体的な議論をさせていただきたいと思います．

次に，非常に大きな影響力のあるメディアとして携帯電話があげられるでしょう．このメディア・コミュニケーションは，インターネットと違って，いろいろ独自の大きな特徴を持っています．当初はその重要な意味というのがよくわからなかったのですが，しかし現在の携帯電話を巡る技術的あるいは社会的な影響などを見聞きするにつれ，大きな可能性をもったメディアであるという，そういう感を非常に強く持っています．これは明日，橋元先生がいろいろ述べられるかもしれません．

一つ大きいのは，従来の電話は，家庭とか職場とかそういうところに電話が設置されているという点にあります．電話をかけるといった時には必ずその人が現在いるところに，家庭なり職場なりという背景というものが，設置されている電話とのかかわり合いで常に出てくるわけです．しかし，携帯電話の場合はそういうことは一切なくて，ストレートに個人に繋がっている，というところが非常に大きい意味をもっているのではないかと思っています．つまり場所が不定である，だから敢えてもっと言えば，場所感覚というものが希薄になるのではないでしょうか．これは後の，私のエコロジーの議論と少し関わらせたいということもあって，その点を強調するのですが，エコロジーというのは，今は様々なエコロジーの思想がありますけれど，「場所」というものを非常に重視する議論というのがいろいろ展開されてきています．これは環境地理学とかそういう方面から始まって風土論とか，そういう話の中で，やはり場所の思想というのは非常に重要なエコロジーの思想として展開されてきています．ある場所に居住する，ある場所に居づく，後ほど生命地域主義という言葉も出てきますが，アメリカのカリフォルニアのあたりでバイオリージョナリズムというある種の環境運動というのが実践活動として出てきました．私のゼミの院生で，その調査研究をやっている学生もいるのですけれど，バイオリージョナリズムという流れも，また地域の生命系に即して生きるという，場所の思想ですね，そういうものを非常に重視する考え方も登場してきました．そういうものと頭の中でダブらせながら考えると非常に興味深いと思います．

先程のマーク・ポスターの話で，「自己は脱中心化され，散乱し，連続的な不確実性の中で多数化されている」という話と関連させていえば非常に興味深いテーマです．これを議論していて，私がふと思うのは「負荷なき自我」という言葉です．皆さんも，ロールズという名前を聞いたことがあると思います．『正義論』，セオリー・オブ・ジャスティスというのを書いた非常に著名なアメリカの政治哲学者です．今日，哲学思想の中には正義論というテーマは非常に大きな位置を示していますが，このはしりとなったロールズの議論の出

発点は，ある種の社会契約論を前提にしています．つまり，ある社会に参加するすべての人が，自分は男であるか女であるか，財産があるか貧乏であるか，そういうことも分からない「無知のベール」そういうものに包まれた中で社会の原理がどうあるべきか，それを判断してみようということです．そうすると，いかなる社会原理を採用するのだろうか，という点から始まり，正義とは何か，我々はどういう正義を望むかということを議論していきます．それが先程いったように，大きなインパクトになって正義論の議論として今日まで続いています．そのロールズに対して真っ向から批判する一つの大きな有力な流れとして，コミュニタリアリズムというのがあります．共同体主義とも言われていますが，その代表者の一人でサンデルという人がいます．彼は，ロールズの前提にしている人間というのは「負荷なき自我」であるといいます．つまりロールズが前提にしている「無知のベール」の状態にいる人間というのは，男でもない女でもない，あるいはあらゆる伝統から解放されている，いわゆる社会契約でいう抽象化された個人に他なりません．そういう負荷なき自我というものが前提にある議論，それは思考実験としてもやはり大きな間違いではないか，やはり最初から人間はある種の伝統なりある種の社会的階層なり，様々な条件の中で自我というものを想定して考えていかねばならないのではないか，という議論がロールズ批判としてあげられています．

だからそういう意味で言えば，ある種の携帯というのは，私なりの感覚で言えば，サンデルの批判の言葉として挙げた「負荷なき自我」というものが実現される，そういう一つのメタファです．メタファとして実現される，そういうものであるというふうに思います．

あるいは，更にもっと極端な言い方をすれば，近代の哲学というのは，いわゆるデカルトの「我思う故に我あり」というのから始まっているというのは，皆さんよくご存知の通りです．デカルトの「我思う故に我あり」というのは，ご存知のようにデカルトは全てが疑わしいといって，哲学の第一の原理，世界を考える第一の原理は何かということを求めて，まさに考える我，考えるこの私，自我こそもはや疑えない．つまり，疑っているこの私自身は疑えないというふうにいった自我ですね．これはまさに「純粋な自我」ですね．だからデカルトは，たとえ世界が無いとしても，疑っている私の自我の存在は疑えないというくらい，かなり誇張した言い方ではあるけれども，その純粋自我の存在性というものを強調したわけです．

身体の様々な我々の脈絡，人間的な脈絡というものから離れて，近代の哲学の第一原理というのは，まさに純粋な自我であるということです．そういう意味では，非常にいろいろな意味で面白いメタファ，メディア・コミュニケーションが目指すメタファがあるのだということです．

そういう点で，かなり前提になる話をずっと述べてきたわけですけれども，メディア・コミュニケーションが一つのコミュニティを生み出すのではないかということです．これが，マクルーハン以来の一つの大きな関心点であって，その批判する者，それを積極的に評価するもの，いろいろ議論があって非常に面白いところだと思うのです．

私なりにこれまでのトピックスというか，これは皆さんの議論の参考にということで，少しポイントみたいな点を挙げてみますと，民主主義を巡って，身体性を巡って，そしてエコロジーを巡っての三つのポイントがあると思います．コミュニティを巡ってということは，先程のエコロジーに通じることです．この３番目のエコロジーに繋がる面というのは，それほど従来は強調されていません．電子コミュニティの話，あるいはメディア・コミュニケーションの話で，私なりに強調した

い点は，このエコロジーとの関わりです．

それでは簡単に見ていきますと，皆さんすでにご存知のようなところがあるかもしれませんが，民主主義あるいは公共圏を巡って印象的な言葉で言えば，「電子アゴラ」か「電子パノプティコン」か，ということが，スローガンのようなことでいえば言えるのではないかと思います．確かにインターネットをはじめとして今日のメディアが，民主主義的な方向性を拡大していくという点が確実にあると私は思います．例えば障害者とか高齢者などの身体が不自由な方や，子育てとか，そういう中で行動が制約されている女性など，そういう人たちがメディアを使うことによって，参加の可能性というのが非常に拡大していく積極面があるだろうということが言えると思います．あるいはこれもしばしば強調されるところですけれども，様々な今までにない繋がりですね．これは午前中の橋元先生の話とも関わりますけれども，このメディア・コミュニケーションを使うことによって，今までは結びつきができなかった，そういう結びつきが，時間空間の制約を離れ，場所の制約を離れて，そういう関係性というものを創り出すことができるということです．これが民主主義という視点からいって積極面があるということが充分に考えられることです．確かにその関係性は，先程言ったテロリズムとかいろいろな犯罪を作り出すという点で，両刃の面，両義性があるわけですけれども，しかし積極面があるという点ははっきりしていると思います．

しかし他面では，ある種の監視社会というか電子パノプティコンというか，非常にたくさんの囚人を一人の監視者が見ることができる，そういうパノプティコン，そういう刑務所の設計が近代の一つの監視社会の考え方であるということで，フーコーが強調したような側面もあると思います．

そういうことが非常にソフトな仕方で展開し，そういう監視の道具にもなりうる点は忘れてはならないと思います．今，背番号制とか，電子的な管理体制がいろいろ提案されているわけですけれども，確かに便利な面もあるけれども，強力なソフトな管理社会を作り出す，そういう元にもなるのです．

最近いろいろな企業から，あるいは金融機関から情報が漏れるという話がありますが，やはりそれを見ても相当いろいろなところで個人情報が蓄積されている．そういう意味では一人一人の情報管理が種々様々に行われている．そういう点が見られるのではないかということが言えると思います．これは企業社会においても，一頃はこのメディアによってヒエラルヒー的な管理システムがもっと水平的なものになっていくのではないかという議論がありましたけれども，最近の，その方面の経営学の友人が送ってくれた本を読んでみると，やはり確かに専制的な意味での管理というのはないけれども，ソフトな管理強化というものが，企業社会においては非常に拡大していっているのではないでしょうか．一見，市民のメディア利用と会社企業のメディア利用というのはソフトな形になっていますから外観は似ていますけれども，しかし実態的なところでいえば，ある種のソフトな管理主義強化といいますか，そこには大きな違いがあるのではないかと思います．そういうような論文を読んだこともありますけれども，ある種の管理主義というか，そういうものを強化していく，ひいては民主主義というものからすればその反対の視点が重要な切り口としてあるのではないか，と思っています．

それから2番目の身体を巡ってということで，以前に西垣通さんの『マルチメディア』を読んで，西垣さんの議論自体は，私としては全体として共感するところもあります．しかし，これはかなり問題だというところも結構あるわけです．非常に面白いのは，当時マルチメディアが大きな話題になったというこ

とで，それを基に，かなり思想的な議論を踏まえて展開している話なのです．彼が強調しているのは，アメリカから生まれてきたインターネットなりマルチメディアというものが，近代の「理性的な個人」というものが前提にしている，あくまでもやはり近代の図式というか理性をもつ個人，しかもその理性といっても脳，その理性を宿す脳というものが身体を制御する，あるいは自然環境をはじめ我々の環境をコントロールするという発想です．理性的な脳が身体なり，環境なりをコントロールするという発想から，現在のアメリカ主導のコンピュータやメディア文化というものが作られている，という議論の立て方をしています．面白いのは，彼によれば感性の共同性というのですか，身体の共同性という，そういうものはメディアによって非常に歪んだものになってくるのではないか，従って，アメリカ文化的なメディア観，メディアのフレームというものを，日本の中に直輸入して物事を考えていく場合には，いろいろな問題があるのではないかという議論です．基本的にはアメリカ的なパソコン文化というのは，個人主義的な発想にもとづいていること．そういった発想にもとづいて「パソコン」というものがあるのだという．要はパソコン自身の出生というのは，巨大なコンピュータ会社，巨大なコンピュータに対抗して，個々人がコンピュータを使って，ある種のカルチャー，対抗文化というものの中で形成されてきた，そういうものとしてあるのだが，そこには脳を中心とする個人主義があるのだという．そういう仕方で議論を組み立てている．いろいろ疑問点もありますけれども，しかし今日のメディア文化というものが，やはり身体性の問題，個人主義の問題，そういった問題を提起しているという点を，かなり印象的に提起していると思います．いろいろ考えさせられるところがあるのではないでしょうか．

またアメリカの哲学者でマイケル・ハイムという人がいまして，『仮想現実のメタフィジックス』という本を，少し前ですが書いています．彼は，電脳空間の哲学者，サイバースペースの哲学者といわれている人だそうで，少し極端な言い方もあるかもしれませんけれど，そこに書いてあることを少し読んでみましょう．

「仮想現実に入っていくときに，自分が肉体であるということを意識する必要はない．感覚中枢インターフェイスの実現，もしくは，第三者に見立てたアイコン表示によって，肉体ごと仮想現実の中に入り込むことが，まもなく可能になると思われる．リアリズムの段階には限りがない．このようなリアリズムが非実在論に転化する可能性がある．そこでは，仮想現実が現実世界と区別がつかなくなり，仮想現実が日常的なつまらないものとなったり，利用者の味わうのは麻薬による幻想のような受動的なものとなったりする」

大袈裟な表現と思われるかもしれませんが，身体性を巡っての問題という点を考えることができると思います．

3番目の論点で，これは先程からいっている，メディア・コミュニケーションが新たなコミュニティを形成するのではないかというところで，いろいろ議論があって，公共圏の問題とも重なって，非常に関心を持たれているところです．これも古川良治さんという，私は直接存じ上げていない方ですが，『電子ネットワーキングの社会心理』という本をかなり以前に書かれています．この古川さんによれば，電子コミュニティというのは地域性を離れて共同の繋がりを作り上げることができる．だから，むしろ，これこそがいろいろな因縁，地縁，しがらみから解き放された共同体を作る上で積極的に評価できる．そういうことで，電子コミュニティというのは，普通に言われるようなコミュニティの虚像では

なしに，まさに実像なのである，と古川さんはおっしゃられているのです．これはまさにいろいろな議論がある重要な論点の一つでしょう．それとかかわって，これも非常に早い時期にガンパートは『メディアの時代』という本の中で，電子コミュニティを，「地図にないコミュニティ」という表現で表しています．これは午前中の橋元先生のところでインターネットパラドクスの議論で言われているような最初の調査で言われていたようなことを，ガンパートという人もかなり早い時期に言っているわけです．調査について，今日の午前中のいろいろな問題点が，評価の仕方という点でお話しされたわけですが，理論的に考えれば，調査の実証的な評価とは別に，ガンパートなり古川さんが言っているような意味での電子コミュニティというものと地域コミュニティとの違いのような，そういう問題性というのは指摘できるのではないかというふうに思うのです．これを，積極的に見るか逆に否定的に見るか，それはともかく，そういうことなのです．

それで，先程の「純粋自我」の話とも「場所の感覚の喪失」という話とも繋がってくるのですけれども，私自身はコミュニティというものを語る場合に，地域性なり，地域を通じての自然生態系，そういうものとの連関性，そういう点が，恐らく最初に述べた人間存在の自然的生命的存在という視点から考えると，やはり深刻に考える必要があるのではないかと思うのです．

その場合に，地域コミュニティあるいはエコ・コミュニティと言ってもいいと思いますが，そのエコ・コミュニティと，メディア・コミュニケーションによって成立するような電子コミュニティとの関係をどう考えたらいいのか，というところが一つ重要な問題としてあるのではないかと思います．

先程のマイケル・ハイムの話とも関係していますが，我々が地域なり，ある種の生態系の中で人間が生命的存在である以上は，そこで自己再生産をする必要があるわけです．そのことと電子コミュニティの中で自己実現をするという精神のあり方があるわけです．電子コミュニティの中で単に電子メディアをいろいろな意味での手段，用具として使うだけではなしに，それが自己実現の空間にもなりうるということは，これは十分考え得ることです．そうした場合，電子メディアの空間というものにおける自己実現ということが，我々が本性的に生命的な存在としてのあり方を再生産し，生命体としての充足感を実現していくという，そのエコロジー的な問題にどのように繋がるか，という話になってきます．その両者をどういうふうに関係づけて考えていくのか．これはやはり情報理論なり，メディア論に関心を持つ人たちにとって考えていただきたい一つの重要な論点ではないか，そんな気が致します．

ちょっと最後の方は端折りましたが，とりあえずは，だいたい以上です．

司会(石井)：ありがとうございました．残された課題である「情報化社会のゆくえ」は，明日，先生の方からお話いただけると思いますが，今までのところで何かご質問はございませんでしょうか．

長田：札幌学院大学の長田です．先生は最初に３つの観点を指摘されていますね．そういうような観点から見た場合，これらを統一的に，常に３つを踏まえてコミュニケーションということについて語らないと片手落ちになるのではないかと考えるのですが，その点について，先生はどのようにお考えでしょうか．

尾関：ええ．私が言いたいのはまさにそれなのです．

長田：それで先生は，例えば，情報様式論とか，いろいろな人の文献とかを引用されていますけれど，これらについてそれぞ

れどんな印象をお持ちですか．

尾関：今言われている3側面，総合的に見るという，そういう考え方からするならば，それぞれが役に立つ考え方ですが，それぞれ限界があり全部不十分だということです．

田中：田中です．一番最初にコミュニケーションのラテン語についてのお話がございましたが，そこでの元々の意味で，元々の意味には「ものを所有する」，従って「ものを交換する」ということも入っているのだということを聞いたことがあるのですが，「もの」という点で見たときに，そういう意味はやはり含まれていたのでしょうか．

尾関：交換するという意味はあるのでしょうね．媒介するという意味で．

田中：その交換・媒介の対象が，いわゆる情報だとか，そういうものではなくて，「もの」にまで及ぶという場合があるのでしょうか．

尾関：あるかもしれません．共通の，共有しているという話ですから，その中に「もの」も入るかもしれませんね．

田中：入るということを示す，はっきりしたものは何かないのでしょうか．

尾関：例えば，これと類縁の言葉で，「コミュニオン」（聖餐や宗教団体）という言葉があります．それなんかは神というものがいて，例えばキリストの身体とか血液ですね．ブドウ酒を飲んだり，パンを食べるというのがキリストの血とか身体を共有するという，そのことによってある種のコミュニオンというのですかね，共通のものを作り出した集まりというか，パンとかブドウ酒を介して共通の集まりを作り出していくわけですね．コミュニケーションの語源と繋がっていると思います．だから，それはあると思います．ものを共有するとか様々な感情知識を共有するというのが．だから今言われている情報を伝達するというイメージからすると，むしろやはりコミュニケーションという概念が近代になって，伝達メディアという仕方が強くなってきたところから再構成されているのではないかと思います．

千葉：コミュニケーションというのを，人と人とが交わりたいという根源的な要求を指す概念だというふうに考えると，地域コミュニティだとか電子コミュニティだとかそういう区別をする必要はないように思うのですが？

尾関：電子コミュニティだというと，やはりいわゆる身体性とか地域性ということを離れるという面で，非常にプラス面はあるのだけれども，見失う面も見えなくなってくる面もあるという，その両面が大事だと思います．だから電子コミュニティと地域コミュニティというもののリンクの仕方というか，それをどう考えるかというのが重要だと思います．

千葉：そういうことではなくて，交わりたいという要求をどう実現するかというふうに考えれば，その時代その時代の使える道具とか条件とかで決まりますよね．その時代その時代，交わりたいという要求がどう満たされるかというような考え方をすればよいように思いますが，そう言う点についてはいかがでしょうか？

尾関：ちょっと話がずれるかもしれませんけれども．例えば最近ペットブームがあって，ペットを飼うことによって，ペットとのコミュニケーションが非常に大きな位置を占めているのです．ペット産業は今や大きな経済分野だというふうにも言われていますが，ペットと人とのかかわりというのは，哲学的な思想的な議論でもあります．だからペットとのコミュニケーションという場合なら，一つの人間

の欲求が満たされない現代には，それこそメディア・コミュニケーションによっては満たされないような生命的な交わりみたいなものがペットを飼うことによって充足されるとか，そういう面はあると思います．

だからコミュニケーションは交わり的なコミュニケーション，それオンリーだというのも間違った考えだと思います．ここで３つの側面と言っているのは，そういう意味なのです．交わり的なコミュニケーションというところに，コミュニケーションの全体性を縮減してしまうのはどうかと思うのです．やはりコミュニケーションを通じて我々の知識なり，あるいは情報化された様々な知的な知識をやり取りする，あるいは社会的なそういうものを再構成していく，その重要性，そういう意味での伝達的コミュニケーションの重要性というのも見落としてはいけないと思います．

だから最初に言いましたように，ヤスパースの言うようにコミュニケーションというのは伝達として考えるのではなく交わりとして考えるべきだ，という考え方も私は冷やかすのですけれども．今言われている電子コミュニティ，例えば携帯で二人の人間同士が絶えず携帯でやりとりする，これはある種の純粋な交わりが実現しているように思われます．だけど，人間の存在という点にとって，やはり携帯による非常に親密な交わりというのは，なかなか評価が難しいと思います．一面的な話をしているのではないかと言われるかもしれない．おそらく橋元先生の場合だったら，携帯を使う人は同時にまたよく会っているのだ，ということもデータに出ているのではないかと思います．実際にそうかもしれないけれど，哲学をやっている人間はどうしても思考実験みたいことをしますから，現実の問題を，人間の本性を想定しながら思考実験的に考えるとどうなるか，ということで言わざるを得ないのです．例えば，Ａさんと Ｂさんが携帯電話でいつもやりとりしているのだけれど，その人間たちも普段いつもしょっちゅう会っているのではないかと言われてしまえば，僕の議論はあまり成り立つ話しではなくなります．しかし仮に携帯で親密な関係を常に作っているというのが一般化しているということを考えた場合，それは本当の意味での「交わり」と言えるのか，というところもあるのです．

それは，さっきのペットの場合，ペットだと言葉も通じない，そういう意味でのコミュニケーションは成り立たないけれども，しかしある種の生命的な関係を通じての親密な関係というのはあります．だからある意味では携帯において，声はある種の生命感みたいなものが出ますし，声以外はすべて捨象されるというのが携帯のコミュニケーションの特徴ですよね．そういうものと動物における身体的な身振りですね，そういう生命を持つものの身体的な身振りを通じてのコミュニケーションというものとは，やはりだいぶ違う性格があるのではないかと思います．私ももうちょっと考えさせてください．なかなか難しいものですから．

高橋：札幌学院大学の高橋と申します．エコロジー問題に繋がる重大な問題ということで，「身体の再生産のために定位する地域コミュニティ」という点についてお聞きします．お話では，地域コミュニティに求められる意義というか，ポジションが示されているのではないかと思いますが，物質的な代謝という活動だけみても，既に地域コミュニティは閉じたものではなく，統一体とみなすことはできないの

ではないか思うのです．食べ物や様々な生活用品を含め，世界中から来ていますし，またゴミの処理一つでも自治体だけでは処理しきれなくていろいろなところでやっているわけで，そうすると地域コミュニティというまとまりをどういうふうに考えていけばいいのでしょうか．また，それがどういう意味で身体の再生産につながっているのか，そのあたりの結びつきをお聞きしたいと思います．

尾関：重要なご質問だと思います．明日に残った話とも関係していると思うのですが，今言われた地域コミュニティというのを，あくまでもエコロジーの視点から理念的に考えていきたいというところがあります．今，地域といってもグローバルな形ですでに結びついているのではないかという，そのグローバルに結びついているというのは一般的にはいいのですけれども，例えばよく問題されるのは，食品の問題で，バナナとかエビという話で，新書版でいろいろ議論されているような話題があります．だから食について，食べるということについて，地域に限定されずにグローバルな仕方で繋がりを持っていて，繋がりがあるというのは現実です．ただ，それを私としてはエコロジーの視点からもう少し批判的に，例えば生命地域主義などの地域観を参照しながら，地域のあり方みたいなものを考え，それをもとにグローバルなつながりかたも考えていく必要があるのではないかと考えています．だからといって専ら自給自足とかそういう話ではないのですし，市場を安易に否定するという話ではないのですけれども．しかし市場のあり方と，我々自身が，自分が必要なものを自分で作るという，その地域の生態系に則した形で，我々の生活の再生産を出来るだけやっていくというライフスタイルと，今のグローバリズムの関係性の問題とを考え直していく必要があるのではないかという，そういう問題意識はあります．

だから現実がグローバルの仕方でも地域に繋がっているのではないかという，そういう議論自身に対しても，もう少し批判的に，地域コミュニティの再構築のためにはエコロジーの視点を基底におく必要があり，それを踏まえたグローバルな関係性を考えていく必要があるのではないかと思っています．そのエコロジー的な再構築としての地域論という，そういうエコロジーの視点から今の電子メディアの活用というのも考えていく必要があるのではないでしょうか．そういう議論の立て方なのです．だから，象徴的にいえば，今の電子メディアの利用の仕方というのは，世界中の１番安い食品を資本の論理に任せて集めてくる，というような仕方ですが，そういう方向ではない活用の方法を考えていく必要があるのではないかと思います．それはまた明日話をさせていただきます．